

2015年
6月30日
火曜日

「おちくぼんだ目のふちに白い風が吹いていきます。よたよたと波を切り船をあちこち走らせているのですがこの暑い日々は潮の中にうずくまっていけばかりなのでしょう。日が一変わりなく雲がうまれ雲が流れていきます。ぼくはかがみこんで餌をつけよたよたと船を走らせていきます。そのたびに海の眠り、空の破れ、折れ曲がった手、折れ曲がった眼の巨大な声の孤独について思いたるのです」
長沢哲夫

ナットン、ガブリエル、ファリス、トゥフイック、マテオ、ミロ、彼らは皆、可愛い小学1年生で、滅茶苦茶にやんちゃで、うちの子どものサッカーチームのチームメイト。日本でもベルギーでもサッカーは人気があるし、日本の自宅がある宝塚市にも少年サッカーチームはたくさんある。ただ、このAnderghemのサッ

栗田 匡相 准教授（開発経済学）

「違う」「違う」の思考を救うために

カーチームがちょっと違うのは、いろんな色の子ども達がいるということ。白かったり、黒かったり、浅黒かったり、黄色かったり。でもうちの息子はそんな違いはまるで何もないかのように彼らとじゃれあつて楽しそうにしている。何故、フランス語もできないうちの子どもが彼らと楽しそうにじゃれ合いながら、サッカーができるのだろうか？

何か「違う」ということを認識出来るようになることが心の成長なのだとすれば、40年以上も「違う」ということに意識を向けてきた私のような人間は、世の中の「違う」としか理解できないのかもしれない。それでも、子ども達のあまりの無邪気さとおおらかさやんちゃぶりに、私の「違う」の思考が停止して、涙がこみ上げるような不可思議なよくわからない感情が時折訪れる。喪失か、郷愁か、あるいは羨望

なのか、それがどういった感情なのか「違う」思考の世界に生きる住人にはよくわからない。

日本ではテロリストの巣窟として報道されていたモレンビーク地域は、ブリュッセルの自宅から直線距離だと10kmも離れておらず、子どものサッカーチームにもテロリストの巣窟地域から通っている子もいる。すごく優しい子だ。彼のお父さんが子どもに向けるまなざしもとても優しい。だからなんなのだろうか？テロリストの巣窟地域に優しい親子が住んでいるということは、テロのなにかを1ミリも肯定できないどころか何も関係が無いことだ。また、テロリストの巣窟地域は、現在では一部観光地化すらしているらしい。欧州の中心地ブリュッセルの普通に公共交通機関でたどり着ける場所なのだから当然といえば当然だ。こういうことを理解・把握できるのが「違

う」の思考だともいえるし、世を生き抜くために正しい「違う」の思考が必要なことは言うまでもない。でも優しい親子がモレンビーク地域に住んでいるということ、そして彼らは知り合いだということ。肌の色も言語も食習慣も違うということ。でも子ども達のじゃれあい何故か私に涙を誘うということ。そこには「違う」の思考ではおそろくたどり着けない何かがある。

単なる郷愁や羨望ではなく子ども達のふれあいが私に涙を誘うのであれば、おそらく社会性や政治性を帯びた私という存在の足下をぐらつかせるからに違いない。50になっても60になってもこの不可思議な感情を受け止めることを大事にしたいと思う。絶望的に想像力を欠いたこの社会に「違い」を揺るがすこの不可思議な力こそが救いだと思うから。